

母の日を特別な思いをもって迎えた方は多いことと思います。特に、今日は、午後に行われる墓前礼拝に合わせて、埋葬式が行われます。そのため、ご家族の皆さまは、今は主の安息の内にあるお母様のことを思い出しながら、この日の礼拝に集われたことと思います。ところで、母の日に限らず、私たちの多くがこの母なるものに格別な思いを抱くのはどうしてなのでしょう。そこで、一般的に言われていることは、幼き頃の原体験です。つまり、未成熟である私たちのことを体を張って守ってくれた存在、それが母なるものであるということです。しかし、男女が一つになり、家庭、家族をなすということは、今日の直前の御言葉が示すように、新しい革袋に新しいぶどう酒を入れるようなものです。それゆえ、革袋の中では絶えず様々なせめぎ合いがあり、ぶつかり合いがあるわけです。また、だから、葡萄酒は新しい革袋の中で熟成することになる。ただ、そこで考えたいことは、その過程において、この母なる存在は、私たちの目に今と同じように映っていたのかということです。

私たちにとっての母なるものとは、過去形で語られるべきものであって、現在進行形で語られるべきものではないのでしょうか。その答えは、そうだとはいえませんが、また、そうではないともいえません。なぜなら、新しい革袋の中で熟成が進むということは、日々変化があるということであり、それゆえ、その目に映るものも常に一定ではないからです。しかし、革袋の中身が熟成するには、常に一定の条件が求められます。私たちはそれを母なるものと呼んだりもするのでしようが、そこで思い出すことは、遠藤周作さんが神様を母なるものと言っていることです。それは、遠藤さんにとって、この変わらぬものがそれだけ大事なものであるからです。ただ、一つお断りをすれば、遠藤周作さんは、だから、お母様＝神様であると言っているわけではありません。大事なことはそのお母様なくして生まれることもなく、それゆえ、今もないということなのです。ましてや、神様と出会うこともなかった。ですから、そういう意味で言うならば、主の日の礼拝を

共にしている私たちについても同じことが言えます。それは、日々変化の中に在る私たちと共にあるのが神様であり、その神様を通して、イエス様と出会ったのが私たちであるからです。

そこで、早速に御言葉に聞いて参りたいと思いますが、先ずは今日の御言葉に聞いていく前に、直前に記されている新しい革袋のたとえ話を思い出していただきたいと思うのです。ただ、この御言葉に聞いたのは一月以上前のことでもありました。ですから、ほとんどの方はもうお忘れなのではないかと思えます。そこで、この新しい革袋と新しいぶどう酒の譬え話を簡単に振り返りますと、その時、私が申し上げたことは、神との出会いも、私たちの信仰も、それは、待つことであり、ゆっくりゆっくり時間をかけるべきものであるということでした。ただし、先ほども申しましたように、新しい革袋の中で新しいぶどう酒が熟成されるということは、その中にある様々なものがぶつかり合い、せめぎ合うということなのです。そして、それが新しい革袋でもあるイエス様の中に置かれた私たちであります。皆さんのご家庭でも実際に日々いろいろなことが起こっているのはそのためです。それゆえ、この日の御言葉が語ることは、イエス様と共にある私たちの日常の一コマであり、従って、ここでのことは、そういう意味で、私たちにとっては非日常的な光景ではありません。そこにあるのは、私たち自身の姿であり、それぞれの日常において経験していることなのです。そして、イエス様はその私たち共にいてくださっているのですが、つまりは、新しい革袋の譬えはこの前提を私たちに伝えてくれているということです。

ですから、そのことを踏まえ、この日の御言葉に聞いていくなら、ここでのことは、先ほどから申し上げている母なるものへの特別な思いとまったく関連のないことではありません。コインの裏表のようなものだとも言えるのですが、それは、成長した今、私たちがこの守られたとの感覚を大切にするのは、私たちが生きるこの世界は、その一方で私たちの心を乱す、実に様々な現実があるからです。そして、その現実とは、愛する者と

の別れであったり、また、解決のつかない病であったりと、この世には、私たちの心をかき乱し、苦しめる、ありとあらゆるものが満ちあふれているのです。しかも、それがいつ何時訪れるかも知れないことを私たちは常に心のどこかで感じてもいるのです。従って、私たちが穏やかで幸せだった日々を懐かしく思い、その思い出を大事にするのはそのためでもあります。ですから、大切な我が子を失った父親の悲しみと、十二年物間病に苦しんできたこの女性の苦しみの背後には、同時に、私たちが懐かしく思うものとまったく同じものを見つめることができるのです。

しかし、そうであればこそまた、今私たちがその目で見ているこの現実、かたつて文部省唱歌で歌われたような世界へと私たちを導くものではありません。私たちにとってはできる限り遠ざけたいと思うものであり、もしかしたらやがていつか、そう思わせるものでもあるからです。けれども、その中で絶対に避けることのできないものが愛する者との別れです。しかし、私たちの成長はそれを含めてのことであり、ですから、私たちが遠藤周作さんのように大事なものが大事であると知らされるのはそれがあってこそのものであるのではありません。つまり、タマゴを抱く母鳥のように私たちの命は、この母なるものに守られていたとこの実体験があってこそ、やがて訪れるであろうこの破れを私たちは受け止めることができるということです。そして、それは、イエス様についても同じことが言えます。イエス様との関わりが大事だと思えるのは、そこに破れがあるからです。ですから、長く患ってきたこの一人の女性にここでイエス様が「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った」と仰る、この信仰の原体験とも言える出来事は、イエス様への期待値を大きくさせることにその主眼を置いていくわけではありません。イエス様に対しては、私たちが大いに期待しているのは間違いありませんが、けれども、この御言葉が私たちに語りかけてくれていることは、病が治ること、死んだものが生き返ること、そういう私たちの側からの期待や要望にイエス様がいかに応えてくださるのかということではないからです。なぜなら、元気になること、しっかりすることだけが私たちの信仰であるならば、重い病が治らず、また、死んだものが生き返らず、それゆえ、私たちの悲しみや苦しみがさらに深くなるとすれ

ば、私たちの信仰は、私たちとイエス様とを繋ぐ力はないということにもなるからです。

ただ、そこでまた考えたいことは、それがもし我が身に起こったとすれば、私たちがどうなってしまおうのかということ、恐らくは、私たちの大半がたちまちの内に路頭に迷うことにもなるのでしよう。それゆえ、この不安と恐れがまた私たちの心を母なるものへと向かわせるのでしようが、では、その時の私たちの心の動きだけを見るならば、それは、イエス様への思いと何が違うと言えるのでしょうか。形の上ではイエス様に対しても同じ事が言えるのではないのでしょうか。ですから、遠藤周作さんが仰ることは、教会の教義的には間違っていたとしても、路頭に迷い、藁にもすがりたいと思うその時の私たちの気持ちを考えるなら、あながち間違っているとは思えませぬ。しかし、だから、どちらでも構わないということではありません。申し上げたいことは、どちらが正しくてどちらが間違っているかという、そういうつまらない話にしないためにも、しっかりと御言葉に聞いていきたいということです。

そこで御言葉が先ず語ることは、路頭に迷った時の私たちの姿です。最愛の我が子を失った父親がイエス様のところに駆け寄ってきて、「私の娘がたった今死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう」と言ったように、それが路頭に迷った時の私たちの姿だということです。ですから、事は緊急を要します。ところが、イエス様は、この父親の願いを聞いて、一目散にその娘のところには向かいません。わざわざ寄り道をしたので。ですから、この父親からすれば、このイエス様の振るまいについてはどう思ったのでしょうか。しかし、イエス様は、そうしたことにはお構いなしに、長年、病に苦しんできた一人の女性が藁にもすがれる思いで近づいてきたのを知って、この人のために大きく時間を割くのです。しかも、それは、当初予定にないことでもありました。ですから、どちらが優先すべきかは明らかです。にもかかわらず、イエス様はこの人のために時間を割き、そして、そこで仰ったことが「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った」というこの一言でした。すると、この女性の病はたちまちの中に癒やされることになったのですが、ただ、御言葉の語る、ここでのこれ

らの順序は、私たちの常識からすると大きくかけ離れているように思います。寄り道をしたこともそうですし、治る治らない以前に、イエス様が「あなたを救った」と仰っていることもそうです。この父親が「私の娘がたった今死にました。でも、おいでになって手をいってやってください。そうすれば、生き返るでしょう」と言ったというものは、イエス様への揺るぎない確信があったからです。つまり、この父親の信仰は立派なものであったということです。けれども、「この方の服に触れさえすれば直してもらえ」と思うこの女性の信仰はどうでしょう、勇ましく、誇らしげなものではありません。途方に暮れ、路頭に迷い、自分ではどうすることもできないことを思い知って、最後の最後にすがりつこうとしたもの、それがこの重い病を負った女性の信仰でありました。ですから、その信仰はこの父親の信仰とは正反対なものです。けれども、イエス様は、その信仰によってこの女性が救われたと、しかも、それがあなたの信仰なんだからと念を押すようにイエス様はこう仰るのです。従って、ここに私たちの信仰の一つの姿を見ることができのですが、ただし、御言葉が私たちに伝えたいことは、私たちの目から見ての良し悪し、強い弱いではありません。一見するだけですと、イエス様の行動が不可解に思えるのはそのためです。

娘を失った父親も、長く病に苦しんできたこの女性も、路頭に迷い、まるで迷子のようにこの世をさまざまに迷っている人々です。そして、それは、こうして御言葉に聞いている私たちも同じです。なぜなら、そのことをはっきりと知らされたのが、コロナ下とこの度の大国による暴挙でありました。それは、私たちがそのただ中を生きているからでもあります。私たちがそこで感じたことは、病から、そして、死の恐怖から、私たちのことを確実に守ってくれるものは何もないということでした。ですから、このような状況にあって、この父親のようにイエス様に信頼することはとても大事なことです。なぜなら、イエス様への信頼が私たちの進むべき道を指し示すのは間違いのないからです。しかし、御言葉は私たちの目を立派な信仰の持ち主である父親へと向かわせるのではなく、割り込むように入ってきたこの女性に目を向けさせるのです。それは、私たちの思い込みを打ち砕くためでもあります。

たちが迷うことなく、イエス様を信頼する者ではないからです。

イエス様がこの父親の家に到着し、幼子の死を嘆き悲しむ人々に向かい大きな慰めを与えた時のことです。御言葉は、その時、人々が「イエスをあざ笑った」と語るのですが、そこで私たちが忘れてはならないことは、このことは私たちの中でも普通に起こりうるものだということです。それは、助けたいと思うイエス様の思いと、助かるわけがないだろうと思うこの人々の思いとがぶつかり合っているのは、どちらも真剣で本気であることとから分かります。そして、それが生きるといふこと、生きていふことでもありますが、従って、この状況の中で父親が沈黙しているのは、イエス様と人々とのせめぎ合いがそれだけ激しかったからでもあるのでしよう。しかし、そこで一つ忘れてはならないことがあります。それは、責任ある立場に置かれたこの父親が、その影響下にある人々を諫めなかつたということです。それは、人々の言葉を聞き、この父親に迷いが生じ、イエス様への信頼が大きく揺るがされることになったからで、父親の沈黙はそのことを如実に現しているように思います。けれども、それは、この時に突如として現れたものではありません。イエス様のところに駆け寄ったその時からのものでもありました。なぜなら、イエス様に出会ったその直後、この父親が「そうすれば、生き返るでしょう」と言ったこの一言は、十字架の上のイエス様に向かって、「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」と、力ある者が語ったことと、内容的には同じものでもあったからです。

それゆえ、このことは、当然、正されなければなりません。そのままにしておけば、イエス様の権威は大きく傷つき、その結果、信仰自体があやふやで曖昧なものとなるからです。ですから、イエス様が群衆をその場から外に出したのは意味あることでもありました。しかし、イエス様がそうしたのには、彼らの間違いを正し、自らの正当性を訴えるためではありません。幼子の命を救うことに集中した、それがこの時のイエス様でもありました。それゆえにまた、女の子を生き返らせたというイエス様の噂はこの地方一帯に広まることにもなったわけですが、ただ、そこでまた私たちは考えたいのです。私たちがイエス様を信じているといふことは、噂話程度のものを信じているということなのでしょうか。もちろん、

それは違います。では、違うというのなら、私たちはイエス様の何を信じているというのでしょうか。

イエス様をあざ笑うことは決して許されることではありません。しかし、そこから分かること、私たちが知るべきことは、人々の犯した過ちではありません。死の現実は何も悔むことのできないものであり、それゆえ、私たちは路頭に迷う者だということなのです。それも、真剣で本気であればあるほど、私たちは路頭に迷うことがあるのです。それは、私たちの生きるこの世にはかように重い現実があり、私たちがこの世界に生きていくということとはそういうものでもあるからです。けれども、この私たちの置かれた現実を、私たちと同じように味わい知ったのが私たちのイエス様でもありました。けれども、御言葉がその墓が空であったと伝えるように、イエス様が墓穴に留まることはありませんでした。それは、私たちとそのイエス様が共にあるからで、新しい革袋の譬えはこの前提を私たちに伝えるものでもありました。けれども、そのためにまた、私たちは道に迷い、途方に暮れることにもなるのです。どこを探してもイエス様は見つからない。ですから、結果をある程度想定し、自らの立場を安定させることに馴らされている現代人にとっては、迷い、それゆえに苛立ちを募らせるこの姿は、それこそ、何のたのめ信仰かと、そう思わせるものでもあるのでしょうか。ましてや、それが私たちの足下で起こったとすればなおのことです。しかし、御言葉がここで人々が「あざ笑った」と記すように、この重い現実の中をこれまで歩いて来たのが主の教会に繋がる私たちでありました。

私たちにそれができたのは、私たちが精神的にも肉体的に強い信仰の持ち主であったからではありません。この父親のように、また、この重い病を負ったこの女性のように、路頭に迷い、イエス様に向かってそういう弱さを現すしかないのが私たちであるからです。しかし、その私たちがそのままでは終わらない、イエス様が「あなたの信仰があなたを救った」と仰るように、イエス様を信じることによって、迷う私たちは間違いなく私たちは変えられていくからです。それは、この弱さゆえに、日々、このイエス様から多くの励ましを受けているからです。ただ、この恵みに与っているのは、こうして地に生きる私たちだけではありません。天に置かれた私たちの愛する

人々も、その弱さゆえにこの同じ恵みを分かち合うものでもあるのです。

私たちが母なるものを思い安し、また、イエス様を思い安心できるのは、その弱さが弱いまま、丸ごと受け入れられているとの実体験があるからです。ただ、そこでどちらが強いかと言えれば、私たちが実際にイエス様に抱かれたことがない以上、やはり母なるものに優るものはないと言っていいのでしょうか。母なるものを語る時のその饒舌さがそのことを物語っているとも言えるからです。けれども、その母なるもの、愛する者との再会を約束するのは神様であり、イエス様です。そして、私たちがこの約束に強い希望を感じるのは、この愛する者との別れに際してのことでもありませんが、そして、その時、私たちがそのことを忘れずにいるのは、母なるものと私たちとが、現にイエス様と共にあるからです。ただ、このことはまた、答えがあるようでないものなのかも知れません。それは、将来において約束されているものだからです。まただから、私たちは迷い、道を踏み外すのです。けれども、それは、私たちだけではありません。イエス様が寄り道をし、人を困らせたように、イエス様も私たちと同じように道を踏み外すようなことをされたのです。けれども、そのイエス様が間違いなくその私たちのことを望むべき将来へと導いてくださっている、順序の違いにおいて明らかにされたことはこの点についてでもあるのです。

ですから、私たちは、迷い、道を踏み外しはしないかと、恐れおののく必要はありません。私たちが母なるものによってこの時を迎えているように、その母なるものを私たちに与え、その生涯を導いておられるのがイエス様であるからです。従って、母なるものが神様でないことは明らかですが、共に歩んだその日々を思う時、そこにイエス様が間違いなく共にいてくださった以上、母なるものを通して、この母なるものの先に、私たちがイエス様を見ているのは間違いのないことでもあるのです。母の日も、そして、この日の御言葉も、そのことを私たちに伝えてくれているのであり、そのように導かれているのが私たちであるのです。祈りましょう。